高南一周駅伝競走大会の由来と現況

神奈川県体育史には次のように紹介されている。

「本市の体育協会は野球部オンリーの協会であったが、種目を増やそうと協議を重ね、小学校を対象とした神社参拝リレーを計画し、当時の小学校は高等科（現在の中学生）があって、この生徒によるマラソンを考えた。（略）戦時中でもあり軍国調はなやかな時でもあったので、『戦勝祈願神社参拝継走大会』と銘打ち、第一校区（茅ヶ崎小）・第二校区（鶴嶺小）・第三校区（松林小）の間でカップ争奪戦をやった。この行事を始めたのが昭和１４年である。」

特徴としては、あくまで生徒が中心ではあったが、大人・青年団員が走ることも数区間あった。コースはスタートが厳島神社（新町）から、ゴールは現在の茅ヶ崎小学校であり、中継は各神社ではあるがその区間は６～２２区間と変動的であった。

昭和２１年と昭和２２年２月１１日開催の名称が「高座南部体育大会区内一周マラソン大会」となっている。すなわち、昭和２２年１０月１日「茅ヶ崎市」として町から市にかわる以前は、高座郡茅ヶ崎町であった。高座郡とは、現在の相模原・座間・大和・海老名・綾瀬・藤沢・寒川・茅ヶ崎が含まれている。この高座郡の南部方面をコースエリアとして駅伝大会が行われたということから、「高座郡の南部方面」⇨「高南」⇨「高南一周駅伝競走大会」という名称になった由来である。

コースは、いろいろと変遷したが、一番広範囲となった時には、茅ヶ崎駅北口をスタートし、国道一号（東海道）を東へ進み二ツ谷神社（新湘南バイパス）から大山街道を西に走って、高田・甘沼・長谷戸を経て堤七曲をかけ上がり、昔の小出支所・藤沢の遠藤支所から御所見中学校・用田へ、南下して岡田・田端・萩園・今宿から国道一号を東にひた走り、今のエメロードから茅ヶ崎駅北口をゴールとする２９キロにわたる熱戦・激戦が繰り広げられた。正月２日３日の「箱根駅伝」に匹敵する賑わいであり、成人の日に開催される茅ヶ崎伝統の一大イベントでもあった。

その後、市が発展するにしたがい必然的に交通事情の悪化を招いて、全市規模での駅伝コースは困難となり、ついに昭和５３年の第４０回大会から、茅ヶ崎北陵高校の周辺コースに変更せざるを得なくなった。

そして昭和５９年の第４６回大会より、より一層の交通安全と大会運営の円滑化を期して、北陽中学校へと移して開かれてきた。

ところが、折からのジョギングブームを反映して、駅伝やマラソンへの関心が高まり、「伝統あるこの駅伝を、以前のように市内を一周するコースに戻せないか」という声が、数多く寄せられるようになった。

そこで、このような意見をもとに検討を重ね、諸機関・諸団体のご協力をいただき、平成４年の第５４回大会より会場（スタート・中継所・ゴール）を茅ヶ崎市総合体育館に移し、市の中西部を周回するコースに変更して開催されるようになった。

女子の部の導入が、昭和５５年の第４２回大会からであり、また、中学生が地区で走れるようになったのが平成元年の第５１回大会からである。

そして、小学生地区対抗・ふるさとランナーの参加や祭り囃子・のぼり旗の応援など、高南一周駅伝競走大会は新たな時代に突入したのが、平成２０年の第７０回記念大会からである。

第７６回大会には、東日本大震災被災地陸前高田市の小学生を招待して、共に汗を流し、絆を深めることができた。

第８０回記念大会では、茅ヶ崎ゆかりの箱根駅伝経験者による、ドリームチーム「ＨＡＫＯＮＥ」が出場した。

また、高南一周駅伝競走大会８０回大会記念誌（昭和１４年～平成３０年）も発刊、その歴史・伝統を再確認した。

第８１回大会からは、柳島スポーツ公園の新コースで開催。第８３・８４回大会はコロナ禍で中止になるも、第８５回大会から再開できることに感謝しながら、県下最古・国内／世界２位の伝統文化を、さらに魅力ある茅ヶ崎らしい駅伝大会にしていきたいものである。